

---

# 現代吸血鬼の日常録

さんご

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現代吸血鬼の日常録

### 【コード】

N5775Q

### 【作者名】

やんぱ

### 【あらすじ】

これはそうたいして誇り高くもなく、

日々をなんとか生き延びようとすゝる吸血鬼の日常録。

基本日常系ですが、徐々に伝奇ものにできればなあ、と思います。作者は何事につけてオチを付けたがるのでどことなくコメディになる予感。

たとえば人に交じるとして（前書き）

なんとなく思いついたものをかきあげてみました。  
文章書き初心者ですので暖かく見守ってやってください。

たとえば人に交じるとして

吸血鬼。

この単語を聞いて貴方は何を浮かべるだろう。

夜の闇に潜み、人の血をすすりつくす化け物。

体を変化させ、狼・犬・蝙蝠等使い魔を操る。

日の光の元は歩けず、流水は渡れず、聖別された品には触れられず、けれど長い時の中を退廃的に、されど誇り高く生きる呪われた生き物。

幻想の中でそれはよく語られる種。

人間に倒されるべき化け物。

御伽噺の中でだけ語られるそれは退廃の美を伴って人を惹きつける。

この物語は現代にひっそりと生きる、一人の吸血鬼、の物語。

ざわざわ。ざわざわ。

「……………が、お薬ですね。お大事にどうぞ」

「竹中さん、内科3番までどうぞ」

ざわざわ。ざわざわ。

病院の中は何時もこつた返している。

怪我人、病人、見舞客、入院患者、職員。

懸命に生きようとする人々でいっぱい。

かたかた、とキーボードを叩く音が響く。

出来上がった領収明細をプリントアウトして、ファイルに挟んで窓口の当番に差し出す。

うん、と凝りほぐれた背筋を伸ばして時計をみれば、針はもう5時を指していた。

「・・・あ、そろそろ時間。局長、在庫確認行ってきます」

「ああ、もう5時か。宜しくー」

上司に一声かけてからデスクを離れる。

おっと、忘れるところだった。発注表も持っていかないと。

喧騒の中を、バックヤードに抜ける。今日の目的は3Fの倉庫。

遠くで響く子供の泣き声と、あやす母親の声。

表と違ってどことなく冷たい空気と静かな雰囲気。

すれ違う人に声をかけつつ階段を上る。

「お疲れさまですー」

「あ、樹さんいっきお疲れさまです」

顔なじみの子と挨拶を交わす。

確か研修で来ている看護師の子だったろうか。

「ってか樹さんが裏にいるってもう5時ですか」

「何その反応。まア、君はまだ帰れそうにない、ね」

「でももう少した、って思うことにおきます」

「そう、じゃあ後もう数時間がんばなさいな」  
「はい。お疲れ様でしたー」

階段を登り切れればそこが目的地。

鍵を開け、むやみやたらと重い倉庫の扉を開ける。

閉まるに任せ内側にはいりこめば、背後からぎい、ばたん、と鈍い音がした。

棚に並んだ薬剤パックの残量、消費期限を確認しつつ足りないものを記入し発注しておく。

しんとした中、さらさらと筆記用具の記入音だけがする。

倉庫の隅にあったカートに空きダンボールを1箱置いて期限の近いものを無造作に投げ込む。

他のつぶしたダンボール箱は広げて隅へ、もう少し溜まったら捨てることにしよう。

後は2Fの医局と1FのICUに持ってけばおしまい。

「お疲れ様ですー。輸液とかもってきましたー」

「あ、ありがとうございます、何時もすいません」

「いえいえ、在庫確認のついでですから」

ニコニコとしながら会話を交わす。

笑顔は仕事の潤滑剤。

特に看護婦さんと事務員とで中が悪いのはいろんな意味で弊害にしかならないので。

物のついでに医局の補充もみてくべきか、とふと思った時、割り込む声。

「婦長、ちよつと廃棄行つてきます」

「あ、阿部さん、いいですよ、カート引いてますし私行ってきますよー」

「あれ、事務員さん。でも悪くないですか？」

「いえいえ、丁度そろそろ巡回とかでお忙しいでしょうっ？」

「え。でも・・・」

ちら、と婦長を仰ぎ見る看護婦さんA。

ちよつと悩ましい表情の婦長。

「ほら、どうせ私カートまた3Fまで持つてかないといけないですから。これからICUにもいかないとなんで、一緒に捨てるものあれば持つていきますよ」

「・・・そうね、お願いしようかしら」

「わ、なんかすみません・・・！そしたらこれひと箱お願いします・

」

ずしん、とカートに乗せられる廃棄箱。結構重たいな、これ。運ぶ音までがらごろ、と重たい。

「お疲れ様ですー。木島さん、お届けものですよー」

「あ。樹さん、何時もすみません。丁度リングル切れてたんで助かります」

「生食も使いますよね？おいてきますよ」

よつと力をいれてどすん、と下に2箱下ろす。

それだけでずいぶんとカートが軽い。

受け取った彼はそれを奥に持っていく。さすがは男の人、ひよいひよい運んで行くのう。

「あ、今から廃棄おいてくる予定なんですけど一緒に持ってくものありますか？」

「今出すものあったかな、・・・ああ、こないだとつたけど結局使えなかった血液パックぐらいですね。今赤箱ないんでそっちでお願いしていいですか？」

「ああ、いいですよー。じゃあお疲れ様です」

裏口のごみ置き場。

産業廃棄物の黄色い箱をずしん、とおく。

そろそろ溜まってきたし、取りに来るよう業者さんに連絡をいれないとまずいかな。

さて、と離れようとした時に後ろから声をかけられる。

「おや、事務員さんお疲れ様」

「警備お疲れ様です。珍しいですね裏でお会いするの」

「前はそうでもなかったんだけどここ最近上がうるさくってねえ。

なんだか裏の見回り回数も増やしとけて」

警備のおじさんはやれやれ、と言わんばかりであった。

「こんな処特に何もありませんけどねえ」

「まったくだ。それじゃあねえ」

見送って、一息。

タイムカードを切れば、ピ、と電子音がする。  
なんだかんだで時間はもう6時半。すっかり遅くなってしまった。  
在庫整理のある日は何時もよりどうにも遅くなる。

「お先失礼します。おつかれさまでしたー」

「はい、お疲れー」

といつても、残業してる人は残業してはいるのだが。

薄暗い夜道を一人帰る。

繁華街、とは言わないが駅近くでもないこのあたりはさすがにこの  
時間帯だと暗い。

人通りはまばらだ。

一本でも道をそれれば、そこは何かがでそうなそんな気配。  
もっともいるのはガラの悪いおにーちゃん達であろうが。

今日のご飯は何がいいだろう。

うわ、野菜高っ。トマト缶でいいな。明日は休日だしなんか煮込も  
う。

迷って休日だし、とワイン2本購入。

後は肉でも魚でもいいか。

「ただいまー……つと」

待つ人もいないが気分です。たどり着いたマンションの自室の空気は冷たい。

外から帰ってきた身には温かいが、それも一瞬のこと。明かりを付け、エアコンを付ける。

どうせこの後飲むんだからシャワーも明日でいいだろう。

ポチ、とテレビを付ければやってるのは恋愛ドラマにバラエティー、ニュース。

とりあえずはニュースに合わせておく。

流れる悲惨な事件は外国のことばかり。

近場で物騒な事件が起きたなんてこともなく、季節行事の様子なんかは流れては消えていく。

平和なのはいいことだ。

さて、食事の準備をする前に一服するか。

「ひさしぶりだなあ。……いただきまーす」

バッグの中から取り出すのは、廃棄を請け負って、そのままくすねた血液パック。

切り込みをいれて、ストローをねじ込む。

ちゅう、と吸い込めば広がる血液。

うつとり、とした後時間が経った感じの鉄錆びた味がきて、う、となる。

「……んん、さすが賞味期限切れ目前……。何か色々足りない味だ……」

いやでもないよりはマシ、まだイイほう。と心の中で呟いて飲み干す。

ぶひ、とついで、結局物足りなさに冷蔵庫からトマトジュースを取り出す。

コップに注いでウスターソース少量投入。

「…………ふう。…………たまには新鮮なのが飲みたいんだけどなあ」

口直し、ではあるが最近ではこっちがメインになってきている。

世の中は吸血鬼、もとい異端にたいして優しくはない。

こうして潜りこめているだけ僥倖なのだろう。

犯罪侵す覚悟があればおいしい血はゲットできるが、後始末の方が面倒臭い。

残念ながら今の自分は能ある吸血鬼でもないので手間暇惜しむのがダルイ。

世の中もつとうまくやれる吸血鬼んぐの方が多いんだろうなあ。

そこまで思っただ度トマトジュースの缶を飲みほした。

これはそうたいして誇り高くもなく、

日々をなんとか生き延びようとする吸血鬼の日常録である。

## 友人との休日（1）

履歴書より一部抜粋

樹・プリムローズ・楓。  
イギリス系クォーター。

幼少時に両親と共に渡欧。

欧州で過ごし、大学卒業後両親を残し帰国。

両親の友人であったという当時の理事長のツテで2年前に就職。  
現在、某県某病院事務として勤務。

ということに、名目上はなっている。  
まあ、要するに、一番下から上は嘘だ。

喉の渴きを覚えて眼が覚める。

かすんだ視界で腕を頭の上に振り回せば、置いておいたペットボトルに手が触れる。

一口だけつけるつもりの中身は、思っていたより乾いていた喉に吸い寄せられるように消えた。

ぶはぁ、と飲みきった空のボトルにキャップをして起き上げれば、昨日のアルコールの匂いが部屋に籠っていて。

窓を開けて空気を入れ替えると、すでに窓からの光が眩しかった。

西向きであるはずの部屋の窓に日が入っている時点ですでにまぶしい

といえはまずい。

「もう昼・・・」

時計をみれば、12時を少し回った処。

ワインを開けたとはいえ、これだけ寝過ごすのも何時ぶりだったか。久しぶりの血も、悪かったかもしれない。

伸びをし、気だるさの残る体を叩き起こすのにシャワーを浴びようとして、ライトの光る携帯に気づく。

ぱか、と開けばメールの通知が来ていた。

「誰からだろ」

内容を確認して、思わずあ、と声が漏れる。

「うわぁ・・・わっすれてた。そっか。今日だったか」

えー。そうするともうあんまり時間がないな。

まあ、とりあえず身支度を軽く整えるに限る。

この沁みついたアルコールをとりあえずどうにかしよう、と風呂に向かった。

|||||

送信者：鈴子

件名：昨日連絡なかったけど

本文：忘れてないよね？

待ち合わせ今日の3時半に駅前だよ？

旅行のお土産持っていくから楽しみにしててね〜ノシ

|||||

「やつほー楓、久しぶりー」

「うん、元気そうだね。半年ぶりくらいだっけ？」

両手にみっしりと物が詰まった手提げ袋を抱えて現れたのは、メルを寄こした相手、三島鈴子<sup>みしまりんこ</sup>。

旅先で日焼けしたのか程良く褐色になった肌に茶髪が眩しい。

そしてこういうと身も蓋もないが化け物仲間である。

吸血鬼がいるならそりゃあ、他にも御伽話のなかにしかない化け物だっているというもの。

「いやあ、3カ月くらいのもりがうっかり長引いたというか。

海外楽しいねっ！治安悪い部分もあるけどフリーダムだし。でもさすがにちよつと日本恋しくなってきたのと懐やバクなってきたんで帰ってきたよー」

「どこいったんだっけ」

「フランスとかイタリアとかシチリアとか。もう食道楽満喫してきたよ。」

本場のオイルサーディンはハマかった。あつちはあつちで魚も新鮮、ブイヤベース最高」

恍惚の表情で語る鈴子。

魚とオイルサーディンのあたりがやたらと強調されているのは彼女

の本性が猫の化生、猫又であるからだろう。  
あ、きちんと尻尾は2本です。

「あ、これとりあえずお土産ね。エクストラなバージンオイル」  
ピンを手渡される。なんだと。

「えええ、なんでまた。輸入雑貨店が最近あるんだからどうせなら  
イタリアワインを・・・」

「いいじゃん、本命のおみやげは別にあるからさ。まあそれはあと  
でね。この後ひいさまとかも来るんでしょ？」

「ああ、『鈴子が帰ってくるならば出迎えずにどうする』とかって  
言ってたかなあ。嬉しそうだったけど放置されすぎてちょっといじ  
めてやるうつて顔してたけど」

「えー・・・ちゃんと定期的にメールはおくってたのになあ。そ  
う・・・」

眼に見えてがっくりするリン。

「し」愁傷様」

がんばって、としか言いようがない。

ひいさま、はお狐さまで、天狐である。

古石<sup>こいし</sup>タ<sup>ゆっ</sup>というのだが、年齢上は相当上であることと、その気位の  
高さから、皆からひいさま、と呼ばれている。

もっとも、本人は『これでもずいぶんと気安くなったものだという  
に』とおっしやられている。

今でそうなら昔はどうだったのかと思うと、いや、知りたくない。

まあのおんきに食べ物を啄んでいる姿を見る分には、主にとっている11歳美少女、などという容姿もあって実に可愛らしい。

そして変化の術を使えば容姿など思いのまま、というのはちとづらやましい限りではある。

いつか尻尾を触らせてほしい、というのが願望ではあるものの、それを頼んだ後を思うと非常に恐ろしいので切り出せずにいる。が、いずれ・・・というのが目下の目標です。

「で、楓、今日この後どこに行くのさ？」

「リンが旅行に行つてた半年の間に、結構新しい店もできてたのさ。ここから5分くらいのトコにもケーキ屋ができてね、一旦そこに集合つてなってる。」

ひいさまとはそつちで待ち合わせで・・・多分何人が連れてきてんんじゃない？で、夜飲み会でどっか借りたつて」

「うわ、やったおさけー！誰がくるのー?!」

「メンツ仕切つてたのひいさまだからなあ。行けばわかるでしょ。・・・あ。あそこだよ」

指差した先に、真新しい作りのお店。

窓ガラスの向こうの客席で、丁度飲み物を口に含んでいた少女がこちらに気づいたようで、手を挙げた。

## 友人との休日（1）（後書き）

読みづらそうでしたので台詞と地の文とで行間を開けてみました。  
1話も後程修正します。

## 友人との休日(2)

「ひいさまお久しぶりー。元気だったー？」

「まあまあ鈴子、私が元気でないように見えるのかしら」

第一声がそれか。

ぴしりと固まるリン。

小首を傾げながら聞き返す様はとてもかわいらしい。が、人をいたぶる様、性根の悪いおばちゃんのごとし。

気に入らなければ誰あるうと毒を吐く。

それがひいさまである。

「え、えーと、変わりないかなっていう慣用句といますかね？」

「ええ、勿論判っているわ、ほんの冗談ですとも。それにしてもしばらく会わないうちに、随分とまた焦げたのね」

焦げたって。

あたふたしているリンをさて、どうしたものか、と眺めているうちにひいさまがこちらを向く。

「樹、貴女も久しぶりね」

「といっても私たちは2週間ぶりくらいですか。何にせよ、お久しぶりです、ひいさま」

とりあえず無難に挨拶。

ほら、と座るようにリンを促し、注文を取りにきたウェイターさんに紅茶を2つお願いする。

窓際のテーブル席には飲み物がもう一つ。

ということは後一人誰かいるのか。と思った処で背後から声をかけ

られる。

「うつつす、お待たせ。もう二人とも来てたか」

「待たせすぎではないかしら、義人」

「ああ、お付きはやっぱり高見くんか。久しぶり」

「ヨツシーじゃん。ういす」

用を足しに出払っていたらしい彼は高見<sup>たかみ</sup> 義人<sup>よしと</sup>といい、化け物ではないただの人間である。

もつとも彼自身が真つ当な人物かといえばそんなことはなく、ひいさまというお狐さまに憑かれていたのだが。

大学3年、必修単位もどうにか取得し、最近時間ができ始めた彼は、あいた時間をひいさまの足として使われているらしい。

「いや、本当ひさしぶりだな。夕はこれで結構心配してたんだからな、鈴子ちゃんのこと」

「……義人、口が過ぎるのではなくて」

「わあ、それであんなにあんなに連絡よこせのメール来てたのか」

「ひいさまはこれで心配性ですからね」

「……貴方たち？」

さっと思わず目をそらす一同。

からかいすぎたかもしれない。

「あー、茶ーしたらすぐ出るか？一応店には6時半って言うてあるけど」

「ひさしぶりだからまだいいじゃない。ね、貴女もそうでしょう、鈴子？」

旅の間のお話をとつても聞きたいわ？

そうにこりと微笑む姿もかわいらしい。  
が、その笑顔は間違いなく獲物を見据えた狩獵者の笑みでしかなく、  
どうみてもさっきの仕返しもまじっているのは明らか。  
相對するリンはすでに首を抑えられた形にしか見えなくて、高見く  
んと私は二人、はは・・・と空笑いをこぼすのだった。  
合掌。

「それじゃあ再会を祝して、ついでに騒ごうか、乾杯ーっ」

ジヨッキ、グラスの響きあう音がキン、となる。

あれから、2時間。

ここはひいさま・・・もとい高見くんが予約した多国籍料理店。  
メニューや雰囲気が女性受けしやすく、カップルにも人気の店で2  
度程来ただけが私も気に入っている。

こつてりと長期不在を絞られ、なんだかやつれた様子のリンも久々  
の友人との再会とアルコールに気を取り戻したようだった。

「しかし無事でなによりだ。いきなり帰ってくるのを伸ばす、と聞  
いた日にはあちらで何かあったのかと思っただぞ」

そう言っておかわりを頼む彼は、永原ながはらの京きょうという。

涼しいかおして、すでに2杯目が空いている。

そして頼んだおかわりは一杯だけかと思いきや、3杯たのんでいた  
あたり、蛇神の一端の貴録であろう。

「そうそう。でも鈴子さんのことだからまた気まぐれで予定変えて  
たりとかありそうかなあ、って皆で言ってたんですよ。あ、これお  
いしい、もう一個頼んでもいいです?」

しゃべるより食べる方が多い彼女は上野 ひのえ。

彼女も立派な妖怪で、正体は二口女。

さすがに人前なので後ろからは頂いていないが、その分前からの摂取量が多い。

地味につまみ争奪戦が各皿で行われている。

傍からみれば少し騒がしい程度だけど、人外5+1の奇妙な宴は始まったばかり。

友人との休日(2) (後書き)

ちよつと短めですが。

### 友人との休日(3)

「一応報告しとくけど、あっちでも遭ったよ」

それはひとしきり騒いで、場が落ち着いてきたところに、ぽつり、と静かな声で呟かれた。

明確な主語のないことば。

けれどこの場にいる皆には、明確にわかるその単語。

「へえ、どんな感じだったの鈴子ちゃん」

「んーとね、楽しい陽気な子も多かったかなあ。あっちのほうは妖精とか、明るいのも多いしね。怒らせるとちよっと、なのも多いんだけどさ」

「楽しかったんだらう?」

「そりゃね! あっちでも騒いできてやったとも!」

「鈴子さんは誰とでも仲良くなるのうまいですもんねえ」

「あー、でも犬は勘弁ね」

「鈴子、狐って何と連なっているか知っているかしら」

再度石化するリン。

はは、と聞こえる笑い声。

軽い会話だけで、済んだことにそつと息を吐く。

あちらにだって、コワイモノは一杯いる。

好奇心は猫を殺すが、文字どおりでは洒落になるまい。

「そう、もう私はあっちから越してきて随分たつから、随分変わったでしょうけど。」

懐かしのヨーロッパ。

ひっそりと年月をただ積むように生きていただけだったけれど、それでもたまにふと望郷の念が景色を思い出させる。

「あ、ちょっとあたしトイレ。楓、一緒にいこー」

「え？ああ、まあいいけど」

リンに声をかけられ、腕を掴まれて引きずられるように席を立つ。まだそんなに行きたいわけでもないけど、本格的にアルコールが回り出す前としてはいいかもしれない。

「いつてらっしゃーい」

「行くついでに揚げだし豆腐でも頼んで来て頂戴」

「あ、私杏酒で」

「俺は日本酒と刺し盛り」

「俺軟骨揚げとビール」

「注文多いよ皆」

「半分は私が覚えておこうか」

通りすがりに頼まれたもの＋自分たち用の注文を店員にしつつ、一路トイレへ。

ドアを一枚隔てれば、お店の活気が嘘のように静か。

「で、リン。わざわざ連れ出して何、どうしたの？」

「さすがに気づくよなー。いや皆で集まる前に言ってたじゃん、本命のお土産があるってさ」

「ああ」

そういえばそんなことも言っていたような。ほとんど忘れてた。

「これなんだけどね」

「ごっそ、とスボンのポケットを探るように取り出されたのはちいさな紙袋。」

手渡された袋は結構軽い。

「あけていい？」

「うん、渡されたもんだし」

誰からさ、と思いつつひっくりかえすと、出てきたのは赤い石の嵌められた片方だけのイヤリングだった。

むしろイヤーフスというべきか。

マジマジとみてみると結構縁取りの意匠などは手が込んでいる。

それなりに値の張るものだろう。

いいものだ。素直にそう思える。が、だからこそこんなものをもらう心辺りがない。

そも、何故リン経由で渡されるのか。

「で、これ、誰からなの？」

「知らない人」

「は？」

なんだその回答。

思わず顔をみれば、言った本人も気まずそうというか、微妙そうな顔をしていた。

「説明してくれる？」

「なんていうか・・・向こうでも騒いできたっていったじゃん？たまたま仲良くなった向こうの子にガーデンパーティーみたいのに誘われたんだよ。その中の一人にね、渡された」

「それって君を気に入ったから、とかでリンに、じゃないの？」  
「ううん、帰り際にああそうだ忘れるところだった、これを君の友達に渡してくれ、って。誰のことだかわかんないし、いきなり言われても困るから。なにそれ、ってこっちが聞き返したら」

今なんて名乗ってるかは知らないけど、ニホンにいるっていうからね。君のそばにいるカーミラによろしく。

・・・なに、それ。

「最初ぼかん、ってしちゃったんだけど、カーミラって確か吸血鬼の女の人版の代名詞だ、って気付いて。急いで追いかけたんだけど人ごみにまぎれてわかんなくなっちゃったのと、名前聞き損ねた！って後から思い出して・・・引き返して今の誰かわかるか聞いてみたんだけど、友達の友達まで呼んでるような感じだったから誰もわかんなくて・・・その、ごめん」

「いや、そんな訳わかんない奴相手に無事でよかったよ。目的は渡すことだけみたいだからリンをどうこう、とかは無いと思うけど」

その名はさすがに名乗ったことはない。

が、そう言う方面に詳しくければ、わかる人にはわかるような言い方ではある。

「もしかしたら他にもこっちに来てるのもいるのかもしれないけど、私が仲良くしてる吸血種なんて、リンだけだったから、さ」

「確かにそれだけ聞くと間違いなく私をご指名だね」

「だから一応渡しはするけど・・・捨ててもいいとは思うよ？なんか曰くつきとかかもしれないし、調べたらまずいもんかもしれないし」

順当にいけば、渡ってくる前の私を知っている誰かだろうが、そのころからの付き合いのある奴がまだ生きていただろうか。一体誰の仕業。

赤い石事態もみればなかなか上等なガーネットである。余り装飾品の類は付けない私でも、これならまあいいか、と思える程度には品がいい。

好みまでわかってて、だったら尚の事正体がしれないのは不気味である。

「とりあえず、一旦もどろろ。皆まだまだ飲み足りないだろうしさ、今日はリンが主役なんだから、席抜けっぱなしもよくないし」「うん、わかった・・・でもなんかあつたら言つてよね、楓」

心配そうな鈴子の顔。

だいじょうぶだから、というように肩をぼん、と叩いて進路を促す。あまりトイレを占拠しているのも他のお客さんに迷惑であろう。

とはいうものの、廊下を歩く最中、気にかからないはずもなく、ポケットの中でころころ転がり謎のプレゼントは主張を続けていた。何の目的があつたのか、それすら赤い石は何も答えない。

新しい思い出と溜息ひとつ、悩み事ひとつ。

それが休日の収穫だった。

友人との休日(3) (後書き)

伏線的な物が張ってみたいくて。

## 一夜明けて

結局、あのカフスは捨てられなかった。

胡散臭いものを身につけるのも家に置いておくのも確かにいやなのだが、売ったり捨てたりした先で、万が一無関係な人が入手して何かあったら、というのがよぎってしまったせいだった。

いくら悪いものではなさそう、といっても絶対に何も無い、と言い切れないのが悲しい処である。

鑑定眼はないわけではないが一般的な貴金属に対する眼であって、そんな特殊な方で眼が肥えてるのなんて知り合いはそういない。

寝室に置くとなにやらうなされそうなので、リビングの戸棚の一つにしまうことにした。

目には入れたくないが、確認するならまだしやすいという位置。

このまま忘れられればいいんだけど。

そうであればいい、と切に願う。

そうこうしている間にまた夜は明けて、いつも通りの朝がやってくる。

「・・・はい、判りました、そうしましたらそれも合わせて・・・はい、カルテも一緒に持っていきますね。はい、・・・はい」

連休を取っていたわけでもないのに、今日は至って真面目に出勤日である。

というより昨日は休日出勤の代休なので平日にねじ込めた、というのが正しい。

病院というのは割といつでも混んでいるものだが、それでも週半ばは休日前後と比べてマシである。

・・・はずなのだが、今日はどうも当てが外れたらしく、実に盛況。受付での患者さんへの対応も、電話対応もそれなりに忙しい。

どうも季節性のタチの悪い風邪が急に流行しているらしく、来る患者の6割がマスク着用だった。

横で同僚が「いや、昨日はどうしたのってくらい暇だったんだけどね・・・」等と言っていたのが恨めしい。一日ずらせばよかったのか、そうなのか。

ねじ込んだ時点ではそんな物予想できるはずもないのが運ゲー的で更に悲しみを誘う。

「打ち込みお願いしますね、ここに置いておきます」

見れば混雑ぶりを何とかしようしたのであろう、主に内科の先生たちの努力の跡がどさつと。

カルテ  
・・・わーい。

「うーあー。もう2時ですよ・・・交代まだなんですかねえ」

「も、もうあと10分くらい待ってもらえる・・・？そろそろ昼休憩終わった連中か、遅番が来るはず・・・」

事務方とはいえ、受付付近にしていると電話対応や患者さんとの応答があるのでは何かつまむこともできず、延々作業するわけ。

そんな中運悪く、休憩交代できそうなタイミングでカルテ出しやら電話対応していたせいで後回しにされ今に至る。

稀にそういうことがないわけではないが、当たるとやはりへこむ。せめて飴でもいいから口にいたい・・・うおっと、電話。

「はい、もしもし」あ、樹さん変わります「・・・?!」

ひどいタイミングだった。

ジェスチャーでこの電話終わったら代わって、とサインを出す。さて、さくつと電話を終わらせたい。

「ちょっと、すみません、午前中にそちら伺ったんですけどどういうことなんですか」

うげ。

当たってしまった・・・と心の中でグロッキーになる。

電話の向こうの方はすごい勢いでお怒りである。

何があったんだ、よくわからないがとにかくお怒りである。

メモで『ごめん、なにかクレームあたった』と書いて交代の子に差し出す。

うはあ、な顔をされた。泣きたいのはこちらもだ。

「はい、申し訳ありません。はい・・・」

とりあえず電話向こうに向かって謝り続ける。

・・・厄日なのだろうか。

結局休憩に行けたのは電話が切れた20分後で、引き継ぎしてたら3時前になった。

上司に「・・・このまま30分働いて休憩してそのままあがる？」  
等と聞かれたがもう腹が限界です。勘弁してください。

・・・確実に厄日だ。

## 厄日は続くよどこまでも

本当だったらおやつをつまみたい時間の3時半過ぎ。

「ふうあー、きつかったー……!」

「お昼今だったんですか、お疲れ様です」

待望のお弁当を片づけて、休憩室で毛布にくるまりごろんと横になる。

ようやくとれた休憩時間。

遅番の一部がもう徐々にあがってきていることに若干のいら立ちを覚えるが、膨れたおなかやささくれた気持ちを静める。

後の30分は昼寝するぞー。

そしたら今日はあとすこしだけ仕事すれば終わりだ。

さすがに疲れた体がうと、と睡眠を取り始める。心地よいまどろみふつと意識が落ちて包まれ……たその時に、急に携帯がバイブ振動。

「……ああ？なに……」

いいところだったのになんだよ、とさすがにぶちん、とくる。

見ればメール通知。

誰からだ、ふざけんな。さすがに今のタイミングは無い。というか今日はそんなことだらけなんだが。

確認したないように、思わず目を細める。

「……本気で厄日だったか」



「私です。連絡は受けました。そちらにお伺いするのは知っていらつしやるでしょうが空いている今週末でしたら・・・わざわざ周りにくい手をお使いにならずにご自分でご連絡ください。では」

眉間の皺がとれることはないまま、携帯の通話を切る。

不愉快な男だ。

が、一番不愉快なのは最後のツテとしてもはやこの男に連絡を取らなければならぬこの状況だろう。

ぎり、と歯噛みして彼女は手を握り締めた。

静まり返った夕闇のなか、電子音が響く。

ピ、ピ、ピ、ピ、ピ。

幾度かのコール音、通話相手が出るのを待つ。

はい、もしもし。連絡を待っていたよ。

思わずイラっとくる発言に軽い舌打ち。

その反応すら相手を楽しませるものでしかないことに余計に腹が立つ。

「難経由で無くて自分で連絡してきてください、この暇人が。というより難に電話してなんで貴方が出るんですか・・・え？週末？確かに空いてますけど・・・迎えを寄こす？ちよつと?!」

眉間の皺がとれることはないまま、携帯の通話を切られる。

相変わらぬのなんたる傲慢。

それに何を考えているのかよくわからない。

・・・週末になれば判るのだろうか。

「・・・なんだってのよ」

ああ、やはり厄日だ。

## すがすがしくない休日（1）

今、私は車に揺られている。

折角の休日、自然豊かな景色のいい山間、乗り心地のいいゆったりとしたリムジン後部座席。

雰囲気ではないがブドウジュースをくゆらせている。

天気も良く、ドライブを楽しむにはなかなかの日、と言いたいたいところだが、気分は憂鬱以外の何物でもない。

あともう少し、15分ほどぐらいたらうか。目的地に着いてしまうのが憂鬱だった。

・・・迎えを寄こす、と言われたその日の朝10時半。

インターフォンが鳴らされ、嫌々開ければ黒服のおじさまがお迎えにあがりました、ときた。

準備していた手荷物を持って出ればそこには高級リムジン。お抱えか。お抱えなのか。

口元がひくつくのは私は悪くないはず、だ。

付き合いのあるご近所に見られていないことを切に願う。

逃げ込むように車に駆け乗り、快適な運転で出発してかれこれ1時間半ほど、で今に至る。

内30分程はリムジンの設備すげー、で遊んでいただけでもいうが。

「樹様、御待たせいたしました。後3分ほどで到着いたしますのでご準備のほどを」

「あ、はい」

っと、いかん、ぼーっとしてしまった。

ジュースを飲みほし、急いでジャケットを羽織る。

顔をあげ、窓の外を見れば、やたらと広い私邸の門をくぐり抜けた処だった。

そのまま車は道を走り、屋敷の入口前で止まる。

運転手さんが後部座席のドアを開ければ、目の前にはお辞儀をするスーツ姿の女性。

「遠路お疲れ様でございます。お待ちしておりました」

「おや、久しぶりだね、雛。何、君が気にすることではないよ」

メールの送り主、雛はすまなさそうに顔を歪めながらこちらに向かつて声をかけてきた。

以前会った時は初々しい雰囲気だったが、今ではすっかりスーツの似合う凛々しい女性になったようだった。

「突然の旦那様の不躰なお願い、誠に申し訳ありません。中へどうぞ・・・奥でお待ちになられております」

「うん、案内よろしく」

重厚感あふれる洋館の玄関をくぐれば、迷路になりそうな屋敷の間取りが広がる。

先を行く雛の後を見失わないようついていけば、コンコン、と足音が響く。

山の中の清浄な空気がそうさせるのか、邸内だというのにどうにも羽織ってきたジャケットだけでは少々肌寒かった。

「それにしても何かあったのかい？突然の呼び出しはある意味何時もの事ではあるけど、今回はちょっと急すぎる感じがするね」

「申し訳ありませんが、私も今回は何も知らされておりません・・・ただ、ご連絡いたしましたあの日に週末にお呼びするように、と。」

そう仰せつかりまして」

決定なのか、こっちの予定は無視かい。

などと多少強がってはみたが滅多に予定など入ることもなく、悲しい限りではある。

もつとも、予定なぞ筒抜けの上での事なのかもしれないが。

「ただ、そうですね。此処の所、旦那さまは何方かどこ連絡を取っていたようでした」

もしかすると、その件と些少関わりがあるのかもしれない。

廊下の扉の一つの前で止まる雛。

そこが目的の部屋なのだろう。コン、と揺らされるドアノック。

「旦那様、樹さまがいらつしやいました」

「ああ、もうそんな時間かい。どうぞ」

ぎい、と重苦しい扉が鳴る。

開いた部屋の窓際には、にこにこ人好きのするであろう笑顔でほほ笑む初老の男が一人。

「やあ、いらつしやい。待ってたよ？」

「ふん、また少し老けたんじゃないかい。白髪が増えてるよ」

この男が今回私を呼びつけた張本人、旦那様こと伊勢柳いせやなぎ 十郎太じゅうろうたである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5775q/>

---

現代吸血鬼の日常録

2011年11月16日20時32分発行